

2018/05/20

「本当の苦しみ」

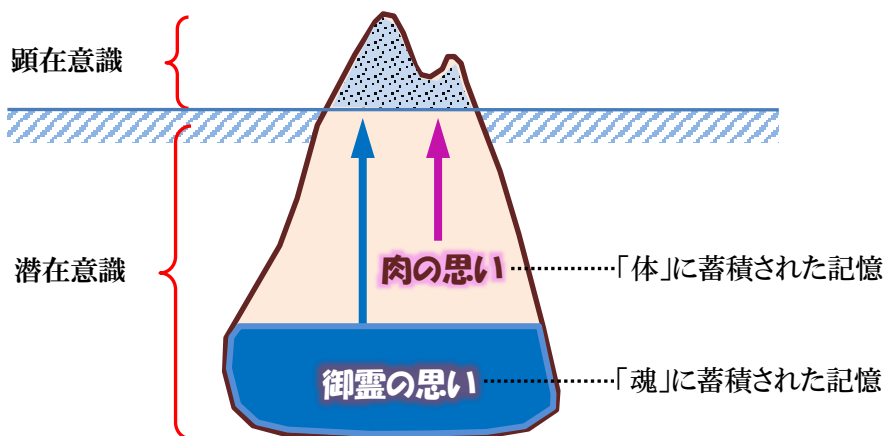
「神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。」(Ⅱコリント 1:4)

私たちが苦しむ時、神は私たちが慰めてくださいますが、自分は何によって苦しんでいるかがわからなければ、何が神の慰めかがわかりません。すると、神が慰めても、それがわかりません。

私たちは、自分が苦しいのは、病気や人間関係や経済的な問題、困難な出来事といったつらい出来事のせいだと考えます。すると、その困難な出来事を解決してくれることが、神の慰めだと思ってしまいます。もちろん神様は助けてくださいますが、実は、出来事は苦しみの本当の原因ではありません。ですから、神は、本当の苦しみを解決して、私たちが慰めようとなさいます。本当の苦しみとはなんでしょうか。

■人間の心の仕組み

心理学では、人の意識は、過去の経験と結びついていると考えます。人間は、知らないことを意識することはできません。つまり、「苦しみを感じる」ということは、過去に苦しみを経験したことがあり、困難に出会ったことによって、すでに潜在意識の中にあつた苦しみが顔をのぞかせたに過ぎないというわけです。この心の仕組みがわからないと、困難に出会って苦しみを覚えるたびに、その困難を解決すれば苦しみが解決すると思ってしまいます。しかし、困難に出会うたびに苦しみを感じるということは、自分の中の苦しみが解決されないまま残っているということを示しているのです。



人には、自分で自覚し判断できる意識と、自分では自覚もコントロールもできない潜在意識とがあります。意識は、潜在意識の影響を受けて存在しており、潜在意識とは、過去の経験が記録されているところです。たとえ本人が忘れていても、その後体験するさまざまな出来事によって、その時の感情が引き出されるのです。

聖書の表現を用いるなら、潜在意識の中には、肉の思いと御霊の思いとが存在しています。人は、土から造られた肉体と、神のいのちによって造られた魂から成っています。肉体は、この地上で、見えるものに安心を求め、神のいのちによって造られた魂は、神を求めます。これが肉の思いと御霊の思いです。肉の思いとは、見えるものに安心を求めた記憶の蓄積であり、御霊の思いとは、神との交わりの経験が蓄積された記憶です。御霊の思いは、神の心を映した鏡であり、悪いことをすると心が痛むという良心として表れます。有限の世界しか感知できない私たちにはわかりませんが、私たちの魂は、潜在意識の中に体験したことを覚えていて、何かの折に意識に働きかけるのです。

たとえば、問題に直面すると、潜在意識の中にある「苦しい」という感情が、意識に訴えかけます。私たちが「苦しさ」を認識するのは、過去に体験した苦しみがまだ解決していないためです。この時、体に蓄積された肉の記憶は、見えるものに喜びを求めるように働きかけます。しかし、御霊の思いは、神と結びついて平安を得ることを要求します。こうして私たちの中で二つの異なる思いが葛藤するのですが、有限の世界に生きている私たちは、どうしても見えるもので安心を求めようとしてしまいます。

この世界は、神との結びつきを失い、人のいのちは有限です。聖書はこれを死の世界と呼びます。心理学で、「有限」とは、「無になるもの」と定義されます。自分達が最終的に消えてなくなるということを突きつけられると、人は恐れを抱き、抵抗しようと試みます。しかし、人は常に時間を突きつけられ、無を突きつけられているのです。やがて自分は無になる、すなわち存在する価値はないと突きつけられているために、人は一生懸命、自分が存在する価値があることを証明しようとしています。これが、自分を認めてほしいという承認欲求の根源です。

自分は存在する価値があることを証明しなければならないという記憶が承認欲求となり、肉の思いは、ほめられること、認められることを求めています。これが私たちの生き方です。

しかし、御霊の思いは、そうではありません。魂は、神と結びついて平安を得ることを要求しています。ここに肉の思いと御霊の思いの葛藤が起きて、自分の意志をめぐる日々戦っているのです。この異なる思いを調整する機能が、私たちの「意志」というものです。

私たちの過去の記憶は、人から認められることによって平安を得るように要求しますが、潜在意識の中では、魂が苦しいと叫んでいます。この苦しきは、むなしさとして感じることもあります。私たちがむなしさを感じるのは、いつもうれしい出来事の後です。ほめられると嬉しいと感じますが、しばらくするとむなしさを感じてしまいます。私たちが様々な出来事を通して、苦しさ、むなしさを感じるのは、潜在意識の中で魂が神と結びついて平安を得ることを求めているからなのです。

■魂が覚えている苦しみとは

人は、三位一体の神に似せて造られました。父・子・聖霊は、それぞれ異なる主体を持ち、一つになって生きるという性質があります。互いが互いを必要とし、互いの中で生きる関係で、一人の神として存在しているのです。

聖書は、このような関わりを愛と呼びます。愛とは「関わり」のことですが、聖書が愛と呼ぶ関わりは、一つとなる関係のことです。

私たちは、その神の魂によって、神に似せて造られました。ですから、私たちの魂は神と同じ本質を持ち、神と一つになることを求めています。しかし、このような願望は、潜在意識の中にあるものなので、人がそれを意識することはありません。そのため、神が見えない地上において、人は神の代用として、人と一つになることを求めています。しかし、それがなかなかうまくいかないために、この地上では絶えず争いが起こります。今日私たちの身の回りで起きている人間関係のトラブルは、実は、魂が神を求めている結果なのです。

この世界は、悪魔の仕業によって、神を見ることができなくなりました。悪魔が、アダムとエバを欺き、神との結びつきを壊してしまったからです。これが、この世界に死が入ったということです。その結果、人は、神に代わる安心を求めようになりました。これが罪です。私たちが苦しむのは、本当は神を慕い求めているのに、それができない状態にあるからなのです。

クリスチャンとなり、神との結びつきを取り戻してもなお、有限の世界では神を見ることはできません。ですから、神と完全に一つになって結びついて生きることは非常に難しく、神と結びつきたいという魂の願望が、まだ解決しているわけではなく、魂は苦しみを訴え続けています。この苦しみは、潜在意識の中にあって通常は意識できないのですが、困難に出会うことによって、表に出てきます。

心理学は、今感じていることから過去を分析して潜在意識を探り、苦しみの原因を分析して、問題解決をアドバイスする学問です。しかし、神様抜きにしては本当の解決はできないのです。苦しみを感じるということは、あなたの魂はまだ解決されていない苦しみを抱えているということです。もし、あなたの魂が平安を得ていたら、どんな出来事に出会っても感謝できるようになると、聖書は教えています。

とにかく、苦しみを感じるのは、魂が解決してくれと叫んでいるからです。私たちは、まず、そのことに気づく必要があります。

■なぜ困難にぶつかったら魂の叫びが聞こえるのか

アダムとエバが神と一つに生きていた時、世界には何の苦しみもありませんでした。この世での苦しみは、すべて神との結びつきを失うという死に原因があります。苦しみは皆、死という同じものによって生まれたものですから、魂の叫びが聞こえてくるのです。

人からほめられて、しばらくすると虚しさを覚えたり、不安になったりするの、成果を求めて評価されたことに喜びを感じているからです。私たちは、いつか朽ち果ててしまうという死の恐怖の中で、私には生きる価値があることを示そうとして、成果を掲げるものです。それが評価されると、自分には生きる価値があるということを、死の恐怖に訴えるが、やがて無に帰するという事実を覆すことはできず、結局、虚しさから逃れることはできません。

これは、すべて、神との結びつきを失うという、死が原因のことです。つまり私たちが苦しみや虚しさを覚えるということは、まだ魂は苦しみを抱えているということです。それを

知らなければ、問題はいっこうに解決しません。本当の原因がわからないと、ただ単に困難な問題だけを解決しようとしてしまいます。しかし、それであなたは、苦しみから解放されたのでしょうか。そうではありません。一つの問題が解決しても、またすぐに新たな苦しみや虚しさを覚えます。それは、根本が解決されていないからです。

人間の心の中には潜在意識があり、そこが解決されないと、意識が解決されないのです。ですから、私たちは、過去に起きた本質的な苦しみを解決する必要があります。それは神との問題です。人は神によって造られ、神と一つになって生きるように造られています。これが解決しなければ何も解決しません。

人は潜在意識のことがわからず、自分の意識がすべてだと思っているものですが、自分の魂（霊）は、自分のことをよく知っています。多くの方は、自分について何も把握しておらず、自分が知っていることはごく一部で、本当のことは見えていないものです。こんな私たちでも、私たちが苦しみを感ずるのは、魂が苦しさを訴え続けているからです。

「いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。」（I コリント 2:11）

イエス様は十字架の上で、「彼らはなにをしているのか、自分ではわかっていないから、赦してほしい」と言われました。私たちは、自分のしていることの本当の理由がわかっていないのです。

悪いことをする人は、皆、必死に神を求めているのです。しかし、それがうまくいかないため、もがき苦しんでいます。神様は人が悪事を働く理由がわかっていたので、人を裁くことは決してしたことはありません。

自分が何に苦しんでいるのかわからない私たちのために、イエス様は十字架に架かる前に、ゲッセマネで苦しみ悶えて祈る姿を見せて、その苦しみをご自身で教えようとなさいました。イエス様は恐れた十字架の死とは、肉体の死のことではなく、神との結びつきを失うことです。

だから、イエスは十字架上で死ぬ時、「わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか。」と叫ばれました。それは、神との結びつきを失うことが、どれほど大きな苦しみか、それが私たちの本当の苦しみだということを示すためです。

「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」（ルカ 22:44）

私たちの魂は、皆、同じ苦しみに悶えているのです。肉の思いに邪魔されて、神と一つになれないことは、これほどまでに苦しいことであり、自分では、気づかないだけで、私たちの魂は、皆、この状況にあるのです。

■どこに解決があるのか

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」(マタイ 6:33)

聖書が教える問題解決の秘訣は、神の国と神の義を第一に求めることです。

なぜなら、私たちの魂はなによりもまず神を慕い求めているからです。魂の願いを満たすことによって、本当の苦しみを解決することができます。もし自分が、肉の満足を第一にして神を信じているのなら、困難をいくら解決しても、魂の問題の解決にはならず、本当の解決にはなりません。だから、「神の国と神の義を第一に求めよ」と、聖書は語るのです。

神の国と神の義を第一にすることは、まず礼拝を大切にすることです。

自分の生き方を振り返ってみましょう。自分のやりたいことが中心になって、神が2番3番になっていないでしょうか。それでは、問題は解決しません。困難にぶつかっては神に助けを求め、見えるところの困難が過ぎ去ると、また同じことを繰り返すことになります。しかし、神との交わりができるようになると、困難の中に感謝と喜びが見えるようになります。

今、それが見えなくなっているのは、本当の苦しみが解決されていないからです。本当の苦しみとは神との結びつきを失うことです。その解決が見えてきたら、つぶやくことがなくなります。人がつぶやくのは、見える困難の解決が神の愛だと思っているからです。そういう人は、困難が解決されないと、自分は神に愛されていないのではないかと疑ってしまいます。

しかし、魂が神と結びつくことが、本当の解決だとわかると、肉の安心が取り除かれることが、神の慰めだとわかるようになります。問題にぶつかるということは、肉の安心が取り除かれることであり、神に愛されているということだとわかるようになるのです。患難にぶつかって神と向き合うことができ、何が神の本当の慰めか、まったく別の視点が見えてくるようになります。

「しかし、富んでいるあなたがたは、哀れな者です。慰めを、すでに受けているからです。いま食べ飽きているあなたがたは、哀れな者です。やがて、飢えるようになるからです。いま笑っているあなたがたは、哀れな者です。やがて悲しみ泣くようになるからです。」

(ルカ 6:24-25)

見えるものに満足してしまうと、魂の叫びが聞こえません。見えるもので安心するのは、実に哀れなことであり、本当の慰めではありません。そんなもので自分をごまかさず、魂が苦しんでいる本当の叫びに向き合しましょう。私たちの本当の苦しみとは、今、神を慕い求めることができない状況にあるということです。

「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。
私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。」（詩篇 42:1-2）

神のいのちをもって造られた私たちの魂は、神を慕いあえいでいるのです。この問題が解決されなければ、いくら困難な状況が解決されても、私たちは平安を手にはできません。本当の解決はここにあるのです。